

シンポジウム⑤

穴性問題

みどころ

中医鍼灸では、配穴において穴性（あるいは穴位効能：漢方薬の薬味が有する薬性に類似した、経穴刺激で発揮するあるいは、期待できる主治作用）はごく常識的に取り扱われているものと考えられる。しかし、中国においても穴性に関する問題は確立されて居らず、議論が継続されている。そこで、当シンポジウムにおいて、穴性に関する問題を俎上において議論することを企画した。

まず、会員等を対象としたアンケート調査によって、穴性に関する認識や考え方、利用頻度等、具体的な運用の実態について調査した内容を瀬尾港二先生（アキュサリュート高輪院長）に「穴性アンケート調査報告」と題して紹介頂く予定である。日本の臨床家の穴性に関する意識調査についても織り込まれた内容であり、その実態に注目したいところである。

次に、中医臨床編集長である井ノ上匠氏（東洋学術出版社社長）より、「穴性をめぐる中国の動向」と題して、穴性問題に関する概略を解説頂く予定である。井ノ上氏は中医臨床誌上において穴性に関する企画も組まれており、本問題に関して非常に詳細な分析もされている。また、臨床家とは違った視点でこの問題について意見を頂くことは、シンポジウムにいても非常に楽しみな視点であると考えた次第である。

3人目のシンポジストは、金子朝彦先生（さくら堂治療院院長）で、「穴性についての考察」と題して、私論を展開頂く予定である。金子先生は中医臨床誌上において独自の穴性論も展開されており、新たな一步を開く内容であると思われる。

シンポジウムは、9月14日（日）の午前9：20-10：30までの70分と短い時間ではあるが、興味の尽きない話題と問題点を包含したシンポジウムになると思われる。なお、指定発言として、東北大学の関隆志先生、愛媛中医研の越智富夫先生、東洋学術出版社の山本勝司顧問にもご意見を頂く予定である。

今回のシンポジウムで結論が出せる様な浅薄な内容ではないが、今後の学会としての研究の方向性を示すことができれば幸いである。

穴性問題についての一提言

金子朝彦
三旗塾

現代中医学は、知つての通り弁証論治というシステム論を選択する。鍼灸も例外ではなく、このシステムに則り治療する。証の割り出しから入り、治法へと展開し、その治法に従い配穴を構築するという手順を踏む。

その際、配穴の根拠になるのが穴性である。穴性はツボの効能・作用を簡潔にあらわしたものであり、薬性に準ずる表記法を取る。これが現代中医鍼灸の特徴のひとつであり、従来の主治症表記とは大いに異なる点である。

穴性はその構造上、大きく定位と定性に分けられる。定位あるいは定位効能は場所・部位から見た効能・作用である。このツボは肝に効く、このツボは表に効く、このツボは手陽明大腸經に効く・・・・などといった感覚で捉える。定性あるいは定性効能は性質、状態からみた効能・作用である。このツボは血を補う（養血）、このツボは風邪を去らす（祛風）、このツボは血瘀（化瘀）を取り去るなどといった意識で用いる。まず穴性はこの両側面から成り立つことを理解する。

そこで、臨床ではこのツボの定位・定性の効を複眼的に捉えながら、またいくつかのツボを組み合わせ、それらに適切な刺激を加え、治療効果を高めて行くことが常道となる。

近年、中国の一部の研究者の間でこの穴性論が問題視されている。穴性の否定あるいは再構築である。その論点を集約すると個人的には以下3点が妥当と考える。

- 1) 歴代文献を踏襲しておらず、にわか仕込み様相を呈している。
- 2) ツボは定位に強いが、いわれているほど定性の効がない。
- 3) 1、2を踏まえ薬性的表記法は妥当なのか？

個人的には論者は穴性論の否定する立場に与しない。しかし論点となる1) 歴代文献の踏襲、2) 定位と定性に関してはその通りであると考えており、再構築もしくは再検討の余地は十分にあると考えている。

現在の穴性表記を活かしながら現状の穴性を考えると、いくつかの異なる視点が浮かび上がる。

- 効能における表記は主治症表記から穴性表記へと大転換したかのように見えるが、果たしてそうだろうか？
- 定性に関わる効能は2次効能といえないだろうか？
- 定位に関わる効能をもっと進化することはできないだろうか？
- 治法を細分化し新たな可能性を模索できないか？

以上4点を問題提起することで、新たな論議の端になればと考えている。